ある男の生きざま

碁楽連理事　　望月 成一

2008 年、元朝の太陽は真っ赤に炎と燃えていた。我が家のマンションの 13 階に駆け上がって東側のバルコニーから朝日が昇るのを待った。八王子の空は快晴であった。太陽に向かい今年一年も良い年でありますようにと祈った。そして今年 71 歳になるわが人生の幸せは何かを考えた。

正月三ヶ日は好きな囲碁は休み家にいた。たまには読書でもしようと好きな棋士の一人、藤沢秀行先生の書を読んだ。内容は自叙伝である。大正 14 年横浜生まれ。5 歳で碁を覚え 12 歳で入門。昭和 15 年 14 歳で入段。数々のタイトルを獲る。酒豪、競輪 キチガイ、無類の女性関係、八方破れの人物で高尾紳路の師匠でもある。

彼は囲碁を通して芸を磨くことに専念した。勝負にこだわる棋士が多いなかにあって、自分の流儀にこだわった人であった。勝負はあくまでも結果であって自分の納得する流儀を重んじた。彼の破天荒な人生は囲碁を磨くための栄養であったかも知れない。女房を泣かせ、周囲の人達に奇人・変人の感情を与えながら、身勝手な言い方をすれば自分を磨いていったのかも知れない。

棋風からすれば厚みを好み定石にとらわれず、あくまでも自分の創意工夫で自分流を通す努力家であったようだ。ポカの多い棋士でもあった。院生になりますと一日 10 時間以上の勉強はザラだったそうです。 そんな時代に彼の棋風に大きな影響を与えたエエピソードを紹介します。

三段時代、木谷實先生の旅行のお供をしたときのことである。「藤沢君、呉清源だって、みんな自分で工夫して強くなったんだよ。」この一言がいまだにたいへん印象に残っている。彼の厚みの棋風を作り上げたのかも知れない。そのころは年がら年中碁のことばかり考えていた。街を歩いていて頭の中から碁盤が離れない。プラットホームの端まで来たのに気づかず、そのまま線路に落ちてしまったこともある。交差点で赤信号なのに飛び出そうとして、他の人に袖を引っ張られ危うく命拾いしたことも何度もあった。電信柱にぶつかるくらいは日常茶飯事だった。もっとも囲碁界ではこの手の話はさして珍しくない。なかでも傑作は鈴木為次郎先生の話で、碁のことを考えながら歩いていたら、

馬の尻にぶつかり「失礼しました」と丁重に詫びたそうです。その話を聞いて私は笑い転げたがあまり人のことを笑う資格はないらしい。

彼は各界の有名人と親交が多かった。囲碁のみならず人間的に幅の広い、深い人柄から男の魅力に皆が興味を抱いたのかも知れない。彼の自分の蒔いた種とはいえ、借金苦、ガンとの闘病を乗り越えていった強靭な精神力は囲碁を打つ闘争心へと昇華していったのかも知れない。過去を振り向かないで、前へ前へとエネルギーを燃焼させていった精神は、生涯青年の気概を与えた要因ではなかろうか。彼の好きな言葉に「年をとるとは、心のエネルギーを失うことだ」と。 囲碁を終わりのない芸術に仕立て、そこに一度しかない人生をぶつけていった男の生きざまの潔さは、私に限りない魅力を感じさせる。

昨年後半、一ヶ月半にわたりガンとの闘病で入院したその間暇にまかせて、かつて仕事をしていた業界の機関紙「紙商ねんきんだより」に短歌を投稿したところ入選しました。それを紹介して終わります。

元重役 ハイ只今とお茶当番 童心に還って 囲碁三昧

(碁楽連だより第 198 号 2008 年 1 月 26 日)